

## 平野の「守山」から私の「道探し」へ——日中青年の成長の方向性

広東金融学院

会計学院 3年

顔心怡

『哪啊哪啊神去村』を読み終えたあの夕暮れ、私はベランダに立ち、夕日に金色に染まる城中村を眺めていた。ふと、物語の中で平野勇気が初めて原木を担ぎ、山林を歩く姿が思い浮かんだ。彼の足元の土には松葉の清々しい香りがあり、私の記憶の中の故郷の村には、あぜ道に広がる稲わらと露の匂いがある。千里を隔てた二つの農村の風景が、この瞬間、不思議に重なり合い、私は平野の物語を通して、日中の農村文化の共通点と相違点を探り、同時に若者の成長に共通する迷いと覚醒を見出した。

平野が神去村に来た当初、林業に対して抱いた反発は、多くの中国の若者が農村に感じている距離感を映し出す鏡のようだった。彼は伐採のために未明に起きることを不満に思い、樹皮が手のひらをこすってかゆくなるのを嫌がり、さらにはこっそり帰りの切符を買って逃げ出そうとさえする。その姿は、高考に失敗したあと部屋に閉じこもっていた従兄の姿を思い出させた。当時、彼は「村に戻って農業をするくらいなら、都会で皿洗いをしたほうがまだ」と言っていた。だが神去村は説教で平野を引き留めたのではなく、「森と共に生きる」日常を通して、少しずつ彼を包み込んでいった。村長は「年輪を見て斧を入れろ」と教え、「一本一本の木にはそれぞれの生命のリズムがある」と語る。先輩の飯

田与喜は彼を山伏の儀式に連れて行き、立ち上る香煙の中で「森は神の住まう場所で、私たちは守り手にすぎない」と伝えた。こうした自然への畏敬は、私の故郷にある「土地の決まり」と驚くほど似ている。祖父は種をまく前、必ずあぜ道に向かって一礼し、祖母は山菜を採るとき決して根こそぎにしない。二人はいつも「自然は私たちに借りがあるわけじゃない。だからこそ、自然に恥じない生き方をしなきゃいけない」と言っていた。ただ、神去村ではその畏敬の念が林業の作業細部に組み込まれている。春の植林は雨上がりを選び、夏の枝打ちは鳥の繁殖期を避け、伐採後の切り株には必ず保護剤を塗る。一方、中国の農村では、その感情はより「家」という根に結びついている。祖父が古い家を建て替えたがらないのは、「梁の木は三代にわたって私たちと共にあった」からであり、母が故郷の産物をスーツケースいっぱい詰めるのは、「これは土地から生まれた思い出だから」と言う。

平野が次第に神去村を受け入れていくにつれ、私は日中の農村文化の最大の違いが、「伝統をどう生かし続けるか」という答えの中にあることに気づいた。神去村の林業技術は「手取り足取り」の伝承で、平野は先輩に木を縛る縄の結び方を学び、何十回も練習してようやく「しっかり固定でき、しかも幹を傷めない」技を身につける。村の祭りも全員参加で、年寄りも子どもに紙灯笼の折り方を教え、女性たちは一緒に供え物を準備し、歩き始めたばかりの子どもでさえ小枝を手に「森に祈る」。このように「伝統を日常に溶け込ませる」継承のあり方は、私の故郷で消えつつある竹細工を思い起こさせる。昨年帰省したとき、竹かごを編めるのは七十を超えた李おじいさん一人だけで、孫は「こんなのは儲からないし、覚えても意味がない」と言っていた。平野の変化は、伝統が「古臭い遺物」ではなく、若者に「それが何をもたらすのか」を示す必要があることを教えてくれた。平野が最終的に神去村

に残ることを選んだのは、林業で大金を稼げるからではない。自分が植えた苗木がやがて大木に育ち、参加した祭りで村中の人々が笑顔になる——そうした「誰かのために、未来のために自分が役立っている」という価値実感と帰属意識こそが、若者の心をつなぎ留める鍵なのだ。今では故郷にも若者の回帰が始まっている。従兄は村でライブ配信を始め、故郷の漬物の作り方を教えている。「家郷の味を多くの人に知ってもらおうのも、立派なことだと分かった」と彼は言う。それは、平野が山を守り、苗木を守る初心と、まさに同じ思いである。

平野の成長はまた、迷いに直面したときの日中の若者の選択の違いと、そこに隠された共通の願いをも浮かび上がらせる。高考に失敗した平野は、最初は霧深い森で道を失った旅人のようだったが、神去村での生活が「やりたいこと」を見つけさせてくれた。一方、私の周りには、卒業後に公務員試験に落ちた人、三、四回も転職した人がいて、皆「自分はいったい何ができるのか」と問い続けている。日本社会は、若者の「試行錯誤」を比較的受け入れているように見える。平野が受験の挫折を手放して林業を学んでも、「出世できない」と非難されることはなく、村人たちは彼の小さな成長を拍手で称える。これに対し、中国では「正解ルート」への期待に縛られやすい。母は「安定した仕事が一番」と言い、親戚は「どこの家の子の給料が高いか」を比べる。しかし平野の物語は、成長とは「唯一の正しい道を見つけること」ではなく、「自分が歩み続けたい道を見つけること」だと教えてくれる。最初は「仕方なく残った」平野が、やがて自ら「守山」を志願するようになり、「大切なのは何をするかではなく、真剣に取り組んでいるかどうかだ」と悟る。今の私も、「将来どんな大事業を成し遂げるか」にこだわらず、平野が苗木を守るように、一つ一つの小さなことを大切にしている。故郷の祖父にビデオ通

話を教え、近所の人々の農産物の包装を手伝う——取るに足りないことに見えるこれらの行為が、私に「自分の居場所」を見つけさせてくれたのだ。

本を閉じると、窓の外の中村には灯りが点り、まるで星が人間界に降り注いだかのようなようだった。

神去村の風は、山々と海を越えて私の故郷にそっと吹き、そして日中の若者一人ひとりの心にも吹き込んでくる。文化がどれほど異なっても、「よく生き、意味のあることをしたい」という願いは、人類共通の原点であると教えてくれる。私たち若者もまた、それぞれの土地で、自分だけの「道探し」を踏み出していくのだ。その道は曲がりくねり、長いかもしれない。しかし情熱を胸に抱いて歩み続ければ、やがて人混みの中で心を安らかに置ける、自分だけの「神去村」を見つけ、生命の花をその場所で鮮やかに咲かせることができるだろう。

## 付記

読書作品：

『神去なあなあ日常』 [日] 三浦しをん著、王蘊洁訳